

第76回 近畿地区 大学建築系学科
卒業設計コンクール応募作品一覧

令和4年4月20日 日本建築学会近畿支部

No.	作品名	学生氏名	大学・学科	図面枚数
1	みづの抛り所ー淀川に流れる動の景観を受け継ぐ船着場ー	彦井麻菜	摂南大学 建築学科	13
2	不易流行JCTー高速道路と街の新たな関係を生む高速ナカー	比嘉七海	大阪工業大学 空間デザイン学科	21
3	アートスクエア0「見る」から「買う」へ生のアートに出会える町	生田和輝	成安造形大学 芸術学科	6
4	住工共栄群 住工混在地域における建築の複合化	上坂朋花	大阪市立大学 居住環境学科	12
5	<u>ウメダハカーめぐり吊る都市の聖域ー</u>	本田未来	武庫川女子大学 建築学科	9
6	あたたかさといとおしさ	久川均星	大阪芸術大学 建築学科	19
7	生きられる道ー琵琶湖有人島における所有の希薄化を前提とした空間の転用ー	守本愛弓	京都工芸繊維大学 工芸科学部	15
8	大地の子ー今日的地形が広がる都市に築くまちと子どもたちのための3つのコウティー	中野雄介	大阪大学 地球総合工学科	34
9	まちに架ける劇場	浦川功稔	大手前大学 建築&芸術学部	6
10	彩 no 韻	中尾彩乃	帝塚山大学 居住空間デザイン学科	5
11	識るー学校教育からはじまる環境拠点ー	松丸倫子	奈良女子大学 住環境学科	11
12	高架下が繋ぐ地域の居場所ー住民らが自らつくるー	三宅里奈	摂南大学 住環境デザイン学科	4
13	須磨寺前商店街若返り計画ー商店街にスキマとツナギをー	加賀美琴	兵庫県立大学 環境人間学科	6
14	<u>水ノ共生作法ー針江集落のカバタの集積による失われた水との暮らし・生業拠点の再編ー</u>	饗庭優樹	立命館大学 建築都市デザイン学科	24
15	浮かぶ、子どもの城	山塚美波	和歌山大学 システム工学科	5
16	廢墟のうちがわからー廢墟化した森之宮焼却工場を大学メディアセンターへと更新するー	水本佳吾	関西大学 建築学科	6
17	相利共生	屋 卓治	大阪工業大学 建築学科	19
18	Parametrical Urban Unitー変容する場を生成するシステムの提案ー	村山滉大	大阪産業大学 建築・環境デザイン学科	7
19	紡ぐ橋ー交差点を通り過ぎる場所から滞在する場所へー	一瀬 颯	京都橘大学 都市環境デザイン学科	7
20	所有と占有その間にあるものたち	趙 添	京都芸術大学 環境デザイン学科	14
21	建築要素の番狂わせ	増田雄太	大阪市立大学 建築学科	20
22	Connecting slope	川島彩音	京都女子大学 生活造形学科	4
23	<u>豊かなものの伝承ーこどもが育ち、こどもで育つー</u>	杉山未羽	京都精華大学 建築学科	19
24	磯に生きるを灯ス	佐藤夏綾	京都大学 建築学科	16
25	小さな街ー少子化の中の保育施設の提案ー	藤澤綺香	武庫川女子大学 生活環境学科	3
26	Y字路村の家族を超えた住口たちー生野区桃谷における三角長屋の再編成ー	李 銀芽	近畿大学 建築学科	19
27	日治メモリアルミュージアムー日本統治時代の台湾の歴史を継承するー	高森京佳	神戸芸術工科大学 環境デザイン学科	15
28	Bird Stationー人と生態系をつなぐ超高層の提案ー	川上航汰	京都工芸繊維大学 デザイン建築学課程	20
29	未来への憧憬ーコモンズを通じてつくる、退院後の白血病患者の居場所ー	木崎理沙	神戸大学 建築学科	6

(受付順) 以上29点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部
令和3年度近畿地区大学建築系学科
卒業設計コンクール（第76回）審査報告

審査員長 久保 岳

令和4年4月20日（水） 審査会場：Web 会議システムを利用

審査員長（互選） 久保 岳
審査員（50音順） 白戸義則・中島 上・東園浩文・松井宣明・松森織江・山田義浩
応募作品 29点（別紙参照）

審査経緯

第76回審査会は、新型コロナウイルス対策のため、前年に引き続きWEBによる審査会となった。

審査員は、設計事務所、ゼネコン設計部所属による7名で構成された。あらかじめ届けられた応募作品の電子データを、各審査員が十分に内容を読み込んだ上で審査会に臨み、様々な視点から、また前向きな審査を心掛けた。

第1次審査では、応募29作品に対して、各審査員が推薦する作品に6票を投票し、6票が1作品、5票が1作品、4票が2作品、3票が1作品、2票が5作品、1票が10作品となった。各作品は、課題の立て方から、解決方法、表現力等が多岐にわたるため、審査員の不明による優れた点の見落としを避ける観点から、票の割れた1～3票を獲得した16作品について、1作品ずつ評価されたポイントについて議論を行った。

第1次審査での議論を経て、第2次審査では各審査員改めて6票の投票を行った。この結果、6票が1作品、5票が2作品、4票が3作品、2票が4作品、1票が6作品となった。

この段階で、絞り込まれてきた作品について、各審査員の所感を改めて議論した。特に第1次審査で議論されなかった、得票数の多い作品についても丁寧に議論を進めた。第1次審査から第2次審査において、得票数の多い作品に大きな変動が見られなかったことから、第3次審査では、第2次審査において4票以上の票を集めた6作品に絞って、各審査員が3票の投票を行った。

結果は、7票1作品、5票1作品、3票1作品、2票3作品となった。

3票と2票の間は僅差ではあるが、議論を重ねた上で絞り込んだ作品を評価した結果であることから、7票・5票・3票の3作品を入賞作品として選定した。

結果的に、第1次審査から票を多く集めた作品が入賞となったが、審査過程においては各審査員が評価した点や理由、またその反対意見など、議論を尽くしこの結果に至った。

（久保）

審査概評

今年も作者の個々の視点から捉えられた多種多様なテーマについての作品が集められ、審査する側の読解力が求められる緊張した審査が行われた。

テーマが多様であった一方、解き方に関しては、課題設定、調査、分析、手法策定、計画立案という定型パターンを踏んだ予定調和の作品が多く、独自のシナリオを描いているものが少なかったことが気になった。“設計”とは将来出来上がる建築の意義を想像し、言葉とビジュアルで価値を外在化させ、その建築像への理解を得る過程のことである。その意味で、設計とは“共感”のプロセスそのものなのだが、客観性を求めるあまり、作者の主体的判断や創造性が影をひそめてしまっているように思われた。

テーマの掘り下げに関しては、課題解決のための手段を実施するところで力尽き目的に到達していない作品が散見された中、さらに踏み込んで真の課題発見に昇華されている作品もあったことは心強く感じられた。

入選した3作品は、いずれもがテーマに対するスタンスの設定から最終形に至るまでのストーリーテリングに優れ、計画がもたらす効果も感じさせてくれる内容であった。

卒業設計とはテーマ設定から計画の最終形までを自作自演するシナリオづくりなのであるから、そこでは思考の過程を含めて力のかぎりオリジナルの表現を追求して欲しいし、その結果としての共感をこそ求めて欲しい、と思いを新たにした今回の審査であった。

(山田)

ウメダハカ 一めぐり弔う都市の聖域一

本田 未来君 (武庫川女子大学)

大阪梅田、うめきた2期に隣接する敷地に計画された納骨施設の提案である。「弔い」という非日常の空間をあえて都心に設け、都市の暮らしの中で自身の人生や死について考える時間を提供する空間が目指されてる。

大阪七墓という土地の記憶の継承、リニアな敷地に「合掌壁」が屹立する大胆でシャープなデザイン、緑豊かなアプローチガーデンから納骨堂を経て聖域へと向かう、高揚しながらも静謐なシーケンス、それらが明解で魅力的なプレゼンテーションで表現されており、その完成度の高さに最初から多くの審査員が高い評価を下した。非日常化している墓参りに批判的な視線を向け、都心における新たな祈りのカタチを求める試みは、作者の手堅い技量によって、こうあれば良いなと思わせる説得力を勝ち得ている。

昨今、家族形態やライフスタイルの変化に伴い、先祖代々の墓を維持継承していくという伝統的な弔いのかたちも変容をせまられている。近親者や己の死を思う時、もっと身近に故人を偲ぶ場を求める声は多い。都心における弔いの場を考えることは、正に今日的な課題なのかもしれない。

(松森)

水との共生作法

—針江集落のカバタの集積による失われた水との暮らし・生業拠点の再編—

饗庭 優樹君（立命館大学）

滋賀県高島市針江集落は湧き水豊かな「生水の郷」と呼ばれ、200年以上続く水との共生文化「カバタ」が存在する。この特徴的だが旧来のコミュニティの場を現代の目で読み解き直し、水と暮らす豊かさを発信する建築計画として再編しようという提案である。

審査員が高く評価したのは、針江集落の綿密な調査・分析を通して明らかにされた水との共生の形態的特徴と、そこから読み取り導き出される生業拠点と外部環境との新たな関係性の構築が、現代においても地域のコミュニティとして成立しつつ、近年増えつつある湖岸地域を訪れるツーリストとの新たな関係を建築計画、地域計画として課題解決・提案されている点である。周辺地域とのつながり・動線のレベルでコミュニティの生業を捉え直し、建築に落とし込まれた水の流れと施設のスケール感を、水系ネットワークの中の配置に巧みに生かしてまとめ上げた手法は実に見事である。

なにより、針江集落（旧饗庭村）にゆかりを持つ作者の、地域に対する深い愛着が感じられ、現代に活かしたいという強い思いがこの作品に込められているように感じた。

（白戸）

豊かなものの伝承～こどもが育ち、こどもで育つ～

杉山 未羽君（京都精華大学）

森の中に5軒の家を建てる、作品をシンプルに言うとそうなる。他の卒業設計作品にみられるような、計画地の歴史性や社会的な課題を見つける調査や分析は見当たらない。それでも選ばれたのは、我々をまるで小説を読んでいるかのような感覚に包み込んでしまう魅力があったからだと思う。

子供のいない<画家><農家兼シェフ><小説家><音楽家><林業家>が、「子供たちが楽しめる場所にしてほしい」と設計を依頼するという設定で話が始まる。それぞれの家に個性的なコンセプトを見つけ出し、それをストレートに表す空間を作る。

そして、模型・イラスト・紙面構成がとても表現力豊かにまとめられ、説明文がいつのまにか時間を進める。

「初めは森で静かに演奏していたが、、、たくさんの人が覗きにくるようになった」など、建物の使い方や使う人に対する深い思い入れが感じられる作品であった。

（松井）